

博士学位請求論文審査報告書

申請者：山崎 聡

論文題目：ピグー倫理学の構造と厚生経済学

1. 論文の主題と構成

本論文は、イギリスの経済学者アーサー・セシル・ピグー (Arthur Cecil Pigou, 1877-1959) が構想した道徳哲学の内在的な研究、及びそれと厚生経済学との関連の考察を目的としている。ピグーは経済学史上、厚生経済学の創設者であり、その最初の体系の構築者であるが、元々は神学、倫理学、哲学を研究し、そうした道徳哲学(倫理学)が彼の経済学研究の背後にあると考えられる。ピグーの倫理学の構造、「効用」「厚生」などの基礎概念を解明し、ピグーにおける倫理学と経済学との関係の基礎づけを行うことが本論文の主題である。

ピグーに関して、初期の思想形成を含め神学や倫理学については、従来、系統的に顧みられることがほとんどなかった。確かに、厚生経済学や規範経済学の文脈でピグーの規範的側面に論及されることはあったが、『厚生経済学』に具現化されている規範は彼の道徳哲学(倫理学)の一部分に過ぎないものと考えられる。その一部分とは「経済的厚生」であるが、それ以外の非経済的厚生の内容や意義に関して、彼の道徳哲学(倫理学)を踏まえて積極的に追究されたことはほとんどなかった。本論文の大きな特徴は、ピグーの道徳哲学の全体像の内在的理解に努め、それを踏まえて彼の厚生経済学及び世代間問題など幾つかの論点を解明しようとしている点にある。

本論文の構成は以下のようになっている。

序章

第1章 理想的功利主義者としてのピグー

第2章 理想的功利主義の構造

第3章 「効用」「経済的厚生」「厚生」概念の再検討

第4章 正義の問題

第5章 世代間問題

第6章 ピグーと優生思想Ⅰ

第7章 ピグーと優生思想Ⅱ

終章 ピグーの体系における重層的理解のまとめ(体系的考察)

2. 各章の概要

以下に各章の概要を示しておく。

第1章では、ピグーの倫理学説上の立場に関する基礎的な問題が資料に即して扱われる。従来の経済学史研究において、ピグーは漠然と功利主義者と看做されてきたという点を著者は指摘し、倫理的に厳密な見地からピグーの倫理学説上の立場を明らかにしようとしている。特に新しい論点として、哲学者 GE.ムアとの理論的な関係について詳細に考察されていることが注目される。ムアは、ベンサムやシジウィックの快樂主義を厳しく批判し、多元的な価値を認める理想的功利主義者として学説上位置づけられているが、著者によれば、この点に関してピグーもムアと同様の立場にある。ピグーは、快樂のみならず、多元的な善の内容を認めており、また善と厚生とはピグーにおいて同義であることから、ここでの考察は厚生経済学の倫理的基礎の解明にもつながりうると論じられる。

続く第2章では、ピグーの理想的功利主義の構造が分析され、『厚生経済学』との関係が考察される。ピグー功利主義（目的論）の究極原理は「各人の厚生全体の増進」であるが、この原理は、最も抽象的な形で表現されている点に注意を要すると著者は述べ、以下のように議論を進めている。ピグー自身も言うように、抽象的な観念は個々の具体的な状況に応じて様々に具体化されるべきものであり、抽象的な究極目的は、個々の具体的な実践規準つまり二次原理を通じて総体的に達成されるものである（これは「功利主義の重層的理解」として説明されている）。こうして、『厚生経済学』における「経済的厚生」はその二次原理の一つとして位置づけられる。このことは、『厚生経済学』における規範は、ピグーの功利主義原理そのものではなく、その一つの応用、二次原理の一つであることを意味する。経済的厚生は広汎な厚生的一部分であって、両者の違いを押えることなしに、ピグーの功利主義の構造を補足することは難しいと著者は述べている。そして、ピグーの道徳哲学においては、経済的厚生を具体的目的とする二次原理だけでなく、別の二次原理も存在することが指摘されている。それは、必要の充足を規準とした二次原理である。主として主観的満足（経済的厚生）を伴う欲求充足の規準とは異なり、必要充足は客観的な性格が強い規準とされる（「客観的必要」）。必要充足の二次原理は、ピグーのナショナル・ミニマム論として現れていると著者は説明する。

第3章では、ピグーの倫理学及び厚生経済学にとって重要な概念である「効用」、「経済的厚生」、「厚生」概念の再検討がなされる。「厚生」については、第1章で考察されているので、ここでは、最初の二つの概念に重点が置かれる。従来の研究では、「経済的厚生」は経済的原因によって生じる厚生の一部として理解されていたと考えられるが、実際はもう少し複雑であると著者はいう。経済的厚生の定義に関わる「貨幣尺度に関係づけられる」ということの正確な意味がここでは追求され、同時にピグーにおいては、効用と経済的厚生とが概念的に区別されるものであると説明されている。

第4章では正義の問題が検討される。正義の問題は功利主義批判における中核的な論点であり、功利主義誕生から今日に至るまで繰り返し功利主義批判の先鋒の役割を果たしてきたといえる。ピグーも功利主義陣営に位置するからには、この問題と無縁ではない。ここで著者は、J.O.アームソンによって提起された「価値と当為との論理的区別」という一種のメタ倫理的観点を採用して、ピグーにおける正義を再構成している。このメタ倫理的観点は、特定の倫理学説（例えば功利主義）だけに適用される考え方ではなく、普遍性を有する倫理的知見であるので、この観点をピグーに対して用いることは特別に恣意的なことではないと主張される。著者によれば、価値と当為性を分ける考え方はピグーにおいても見受けられ、それによって、従来、正義に反すると批判されてきた功利主義的犠牲（効率性による正義の蹂躪）のようなことはピグーに関しては当てはまらないとされる。

第5章ではピグーにおける世代間問題が考察される。著者は、この問題に先鞭をつけたコラードの主張を基本的に踏襲しつつ、世代間問題に関するピグーの倫理的側面に重点を置いて、幾つかの論点を発展させている。著者の指摘で重要だと思われるのは、ピグーが必ずしも将来世代の効用最大化を最優先的には考えていないという点で、これは必要以上に現在世代を犠牲にしないという意味である。なすべきことは将来世代の欲求に応えること（効用最大化）ではなく、基本的生存基盤を保障することであり、ピグーが訴えている「資本の現状維持」はその具現化であると論じられている。

第6, 7章では「優生思想」が扱われる。優生学の旗手であるピアソンらは、貧者や弱者に加担する福祉・慈善政策に激しく反対し、優生学的主張は、貧者への分配を改善しようとするピグーの厚生経済学精神と真っ向から対立するものであった。第6章では、「科学と倫理」という観点から優生学に関するピグーの議論が考察される。優生学は、科学的知見と倫理的判断の相違をきちんと踏まえ、科学によって規範が導かれるという論調を見せる傾向（自然主義的誤謬）があった。この誤謬を最も明確に指摘したのはムアであり、ピグーもムアに倣って、優生思想のイデオロギーを批判したことが示されている。そして第7章では、具体的にピグーの優生学議論の内容に立ち入った考察がなされ、「遺伝」や「環境」に対するピグーの見解が詳しく論じられている。

終章において、著者は、これまでの各章で部分的に説明されていた論点を総合し、ピグーの道徳哲学の全体像を要約しつつ、残された課題について簡潔に述べている。今後、ピグーにおける倫理学と経済学という論点をさらに深めて、拡張していくためにも、まず、彼の倫理学をできる限り体系的に構成するという基本的な作業を行う必要があると考えられるが、本論文はこの基本的作業に該当すると著者は位置づけている。

3. 評価

以上が本論文における主要な内容の要約であるが、本論文がもつ積極的な意義は次のよ

うな点に見出される。

まず本論文は従来顧みられることの少なかったピグーの道徳哲学（倫理学）と本格的に取り組み、ピグーにおける倫理学の構造を資料に即して克明に検証している。ピグーの倫理学、具体的には功利主義の再解釈を通して、GE.ムアの倫理学との比較を詳細に行い、ピグーを「理想的功利主義者」として位置づけたことは本論文の貢献であろう。次いで、「厚生」と「効用」が区別され、ピグーの功利主義は、「究極的、多元的な厚生」という抽象的根拠と、そのような厚生を増進する具体的基準という重層構造をなしており、経済的厚生に限定した「厚生経済学」は究極目的である厚生を実現するための具体的基準たる手段であることが示されている。そして、「究極的な厚生」を増進するより客観性の強い原理として「必要の充足」を基底にしたナショナル・ミニマム論があり、それがピグーにおける正義論として位置づけられている。さらに、ピグーにおける世代間問題を検討し、ピグーの主張は、将来世代の効用最大化よりも、資本、環境の維持によって生活水準を保障するという正義の準則であることを明らかにしている。

また、本論文に収録されている一連の研究成果は、すでに『経済学史研究』（『経済学史学会年報』）、『一橋論叢』などの査読誌や書籍の一部となっており、学会で一定の評価を受けている。

もちろん、本論文には幾つかの限界や問題点があることも否めない。当初、第2章では、ピグーの厚生経済学体系の中に必要充足の規準が内在しているかのような論旨になっていたが、口頭試問での指摘を受けて修正し、必要充足の規準を道徳哲学のなかに位置づけるという論旨に改訂した。また、先行研究の扱いにやや粗雑な面も見受けられ、必ずしも適当とは思われない文献参照が幾つか見受けられた。平等に関しても議論されているが、善の増大という効率性と平等（正義）との関係に関してまだ突き詰めて考察する余地が残されており、今後も継続して取り組むことが望まれる。

以上のとおり、本論文は、不十分と思われる限界や問題も指摘されるが、全体としていえば、道徳哲学（倫理学）を基礎にした独自のピグー研究の枠組みの設定とそれに基づく丹念な古典的資料の読解と論理的な再構成を通じた意欲的な研究の集大成として、積極的な意義を認めうると思われる。著者は、所定の口頭試問において我々審査員から指摘された幾つかの論点や問題点についても受け答えを行い、その後、かなりの時間をかけて必要な改訂を行い、指摘された問題点に改善を加えた最終論文を提出してきた。

我々審査員一同は、所定の口頭試問の結果、及びその後の改訂を経た最終論文の内容に対する総合的な評価に基づいて、著者の山崎聡氏に、一橋大学博士（経済学）の学位を授与することが適当であると判断するものである。

2008年2月12日

審査員 (50音順)
石倉雅男
音無通宏
鈴木興太郎
(委員長) 西沢 保
吉原直毅